2013年9月25日（水曜日）の下野新聞に弊社社長の記事が紹介されました。

13　2013年（平成25年）9月25日（水曜日）

下野新聞

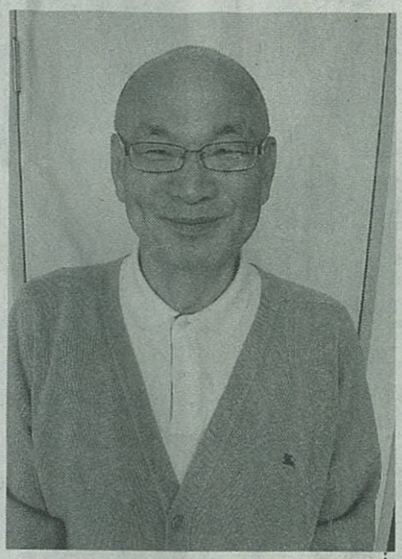
地論 26

2013 25

那須塩原市

五輪招致に学ぶ夢の実現

常識破る発想持とう



「パン・アキモト」社長

秋元（あきもと）　義彦（よしひこ）（60）

1953年、那須塩原市生まれ。法政大卒。78年秋元ベーカリー入社。96年「パン・アキモト」代表取締役。95年「パンの缶詰」を開発。2009年、パンの缶詰を下取りして食糧難地域に送る「救缶鳥プロジェクト」を開始。

念願だった東京オリンピック招致が決まって、全国的にお祭り騒ぎが続いています。4年前、招致活動に失敗した悔しい思いと深い反省が今回の成功へ導いたのではないでしょうか。

成功請負人といわれるプロの指導を受け、綿密なソフトとハード両面の準備、そして国内外での各種PRや本番に向けたプレゼンテーションに力を注ぎ、練習に練習を重ねた結果と思われます。テレビを通じて見た国際オリンピック委員会（IOC）総会での日本代表団のパフォーマンスは、PR下手な日本人色を一掃する新時代人を表現していました。

さて私の住んでいる那須塩原市は風光明媚（めいび）な那須高原の一角に位置し、北部に二つの温泉郷を持ち、山麓部は酪農が盛んで牛乳の粗生産量も本州第1位を誇っています。さらに平野部は農業と商工業のバランスがよく取れたまちといわれてきました。このように表現をすると理想郷のようです。

しかし2年半前に起きた東日本大震災と東電福島第1原発事故が状況を一変させました。今でも毎日発表される放射能の数値が市民をはじめ町を訪れる人々に不安を与え続けています。それが風評として広がってしまうと経済への影響と人口減に結びつく恐れがあります。私たち市民のほとんどは毎日元気に生活を続け、何もなかったように暮らしていますが…。

8月に入り東京オリンピック招致活動の最終コーナーで一大問題が勃発してしまいました。それまでの下馬評では、東京は「財政破綻懸念のマドリード」や「国内治安に問題のあるイスタンブール」に大きく差をつけているようでしたが、いわゆる汚染水漏れ事故が表面化した後は、歯切れが悪く国民に不安を与えるような東電の対応で一気に形勢逆転の恐れが出てきました。そのような状況下、日本時間8日早朝の投票で見事勝利したニュースは、日本人に喜びと勇気を与えました。

招致委員会の綿密な計画とそれを実行するための努力と練習、そしてそれぞれの役職者のチームワークを伴ったパフォーマンスが、勝利に導いたものと信じています。4年前に敗北した反省を踏まえて「前例が無いことへのチャレンジ」を行ったことが、勝利の女神をほほ笑ませたものと確信しています。

私たちのまちづくりやまちの復興においても同様なことが言えると思います。短期・長期ビジョンを持った構想を打ち立て、その実現に向けた賛同者増加の作戦を立て、期限を設けることによって夢の実現に近づくのではないでしょうか？　民間活力と知力の導入、そしてライバルに打ち勝ちたいとの競争心を持った志が、閉塞（へいそく）感を打破する策の重要点と考えます。

「新」とは立つ木を折る、との意味を持っています。従来の常識を打ち破るような発想を持つことこそ「まちの新しいステージ」へのステップと信じています。市政執行を担う人たち、行政マン、そして青年たちに期待するところです。東京オリンピック招致成功にあやかって、わがまちもイノベートに一歩踏みだしたいものです。